

「川祭り」の河童と折口信夫（その一）

□な
ら□

民俗通信

西村
博美

A black and white portrait of a middle-aged man with dark hair, wearing glasses, a mustache, and a light-colored shirt.

(才能ある) 本人はまあそれでいいとしても、そんなやり方を(おつかな)弟子どもが真似をしたらどうなるか」と続けた。森口は、柳田のその日の折口批判や門弟たちに向けられた厳しい矛先を「柳田台風」と名づけて、きつちりと憶えている。

また森口の日記には、こんな箇所がある。「道で先生はハタと手をうつていいわれた。河童の鳴き声を『アレケケレレス』と鳴かせよ」としたのではないだろうか。

また、森口は、『折口信夫の河童』に、「祭りは、お弟子の西角井正慶先生が祭文を作られ、奇妙なま

▼一川祭り

て、うつる隈な
祭り、あぐる篝火とび越
て、火を踏み越えて、踊
影あり

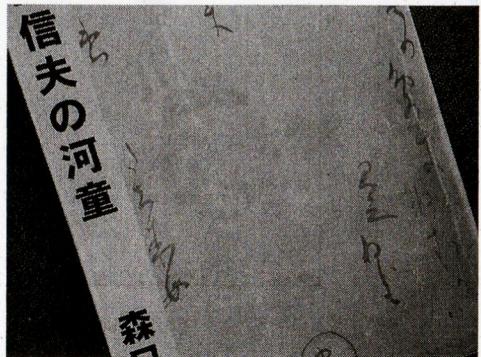
同じ折戸門下の池田弥二郎や森口の記録に残るほかは、手がかりのようなものもなく、いままでもうそのことを語ろうとする人もいたくなつた。森口武男の記録から少し見ていくことにどう。

▼折口信夫と「河童」

ど、どうもこの柳田氏のさきの言葉と無関係ではなかつたように思う。カッパの由緒正しい系図を見つけられたのは、柳田氏が皆に披露されたたどおり、（折口）引用者註）先生があつたのだから（森口「前掲書」）。柳田氏のさきの言葉」とは、昭和十年一月一日の森口武男の「日記」を通じて、その「祭り」の様子のおおよそを知る事ができる。

自分で脚本、門弟が演技

折口の門弟だった森口の家に残っている。自著『折口信夫の河童』によれば、昭和十一年の「川祭り」の日に、国学院大学の講堂に吊(つ)るす幾つかの行燈(あんどん)の絵を、折口は「三秒くらい」で描いていたという。祭りのあとで、森口が折口からもらつたそれは、釣り竿(さお)のようなものを肩にした「緑(色の)カツバ」で、見物に来ていた北原白秋もこれを欲しがっていました。



折口信夫の描いた河童（森口武男『折口信夫の河童』2000 の表紙）

森川武男の「日記」を通して、その「祭り」の様子のおおよそを知ることができる。
昭和十六年六月十五日に、前準備期間を経て、折口「河童劇」が主催する「郷土研究会」のメンバーによって催されたこと。さらに興味がひかれたこと。
「河童劇」の脚本を書き、門弟に演じさせている。また、折口自身が終始出演者の学生たちと一緒に、なつて、あるいはそれ以上に楽しんでいることである。河童劇そのものの内容については、どのようなものであつたのか肝心のところが分からぬのだが。
森川の日記には、「河童劇」なる配役と出演者名が記されている。「無類漢や(王)ライカン、巫女ルンペン、学生のモダンスマフトリ」と語ったあとで、柳田は、「折口君は材料なしで、直観でものを言つてしまふ。」
柳田氏が皆に披
おり、「(折口)先生であつたの前掲書」。のさきの言葉
二十年一月一日の
脚本、門弟が

この戯曲の中の文句。あれ
面白いだらう」。
藤井春洋、森口は、川祭り
の「日前に、折口がそう話
すのを側で聞いている。
「芝居のケイコをやる。
なかなか面白い。先生が面
白そうに笑われる。フレケ
ス」。

森口は「森岡君と渋谷南
口で配った」という「川祭
演があり、最後に神樂（小
劇）があった」と記してい
る。

表題は、「水神祭並びに
河童を語る会」以下、「一、
二、三、四、五、六、七、八、九、
水虎祭執行（一時）」、「一、
河童を語る座談会（二時）」
／国学院大学内／郷土研究
会／御来聴歓迎いたしま
す」とある。

昭和十年六月のその日か
ら、もうすぐちょうど八十
と一年を数えることにな
る。さて、森口武男とその
「せんせい」折口信夫の河
童は、どこへいつてしま
つたのだろうか。

さて、たしかにこの劇は、
森口の日記からも興味深い
内容だったことが窺（うか
が）えるが、重複なことは
いわゆる「河童」なるもの
の本質であって、この祭り
い。

（詩人・奈良民俗文化研
究所研究員）

折口信夫（1887～1
953年）民俗学・国文学
者、歌人。
森口武男（1912～2
001年）詩人。

文
化

藤井春洋、森口は、川祭りの「日前」に、折口がそう話ながなか面白い。先生が面白そうに笑われる。フレケ

演技

ノ戯曲の中の文句。あれ面白いだらう」。

春洋は、折口門下の高弟藤井春洋。森口は、川祭りの「日前」に、折口がそう話ながなか面白い。先生が面白そうに笑われる。フレケ

森口は「森岡君と渋谷南口で配った」という「川祭演があり、最後に神樂（小劇）があった」と記している。

表題は、「水神祭並びに河童を語る会」以下、「一、水虎祭執行（一時）／二、河童を語る座談会（二時）／三、余興として、神樂」。日時 六月十五日（土）午後一時より／場所 全国神職会館講堂（国学院大学裏）／国学院大学内／郷土研究会／御来聴歓迎いたします」とある。

昭和十年六月のその日から、もうすぐちょうど八十年を数えることになります。さて、森口武男とその「せんせい」折口信夫の河童は、どこへいつてしまつたのだろうか。

さて、たしかにこの劇は、森口の日記からも興味深い内容だったことが窺（うかが）えるが、重要なことは、いわゆる「河童」なるもの本質であって、この祭り

（詩人・奈良民俗文化研究所研究員）

折口信夫（1887~1953年）民俗学・国文学・歌人。
森口武男（1912~2001年）詩人。